

## データから読むゼロ年代 一縮小する日本らしさー

E. FORUM 2017

岩井八郎

京都大学教育学研究科

2017年8月19日

1

### 概要

- いわゆる「ゼロ年代」(2000年代)は、戦後日本社会の安定を支えてきた要因に綻びが目立ち、未来への不安が高まった時期であった。
  - 学力の低下や少年犯罪の凶悪化など教育問題がメディアをにぎわし、教育改革が繰り返し提唱されてきた。
  - 非正規雇用の拡大によって、若者層の職業的キャリアが不安定化した。
  - 所得が向上せず、安定した正規雇用層とそれ以外との格差が拡大した。
  - 出生率は先進諸国の中でも最低水準を推移していた。
  - 少子高齢化の急速な進行とともに、世代間の相互扶助関係も変化を余儀なくされてきた。
- これまで実施してきたライフコースの社会学研究の成果を紹介しながら、ゼロ年代を読み直し、日本社会の行方を考えたい。

2

### 概要

1. 「家族」と人生モデルのゆらぎ
2. データから見る「ゼロ年代」
3. 日本人の人生パターン: 2つの転換点
4. 国際比較からみた日本のユニークさ: **家族主義**
5. データで示す日本人のライフコースの変化:
  - 女性のライフコースの変化: 「団塊の世代」と「団塊ジュニア」
  - 最近の調査データから: ライフコースの分節化
  - 若年男性のライフコース: 20歳代の不安定化
  - 高年齢層の家族形態: 子どもとの同居/別居と年収
6. ポスト・フォードイズム型ライフコース
  - 分節化の進行
7. 家族とライフコースのゆくえ:
  - 親密な人間関係の「模索」: 人生全体に拡散
  - 個人の選択と格差への対応
  - 家族を脱家族化する

3

### 1. 「家族」と人生モデルのゆらぎ

- 日本の家族
  - いわゆる「日本の家族」の縮小/「周辺」の拡大
    - 人口学的変化: 少子化、晩婚化、高齢化、離婚、単独世帯...
  - 「家族」についての認識
    - 「親密な人間関係」のあるべき姿: 理想の家族
    - 「困難」の温床: 虐待、「負」の人間関係、経済格差
    - 病理、崩壊が語られると同時に、理想としての「家族」が存続する
    - 「日本の家族」: 形成が困難、理想として持続
  - 1970年半ばからの40年間
    - 1990年代半ばまで: 国際比較からみるとユニーク
    - 1990年代半ば以降: 「日本らしさ」のゆらぎ

4

## 1. 「家族」と人生モデルのゆらぎ

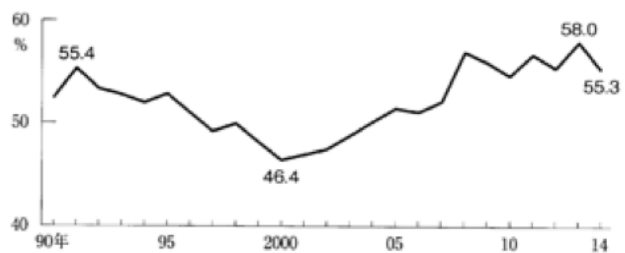
- 1990年代後半以降: 日本人の人生のあり方が変化
  - 1970年代から90年代初め頃までの安定性
  - 「失われた10年」: 1990年代半ば以降
    - 高等教育進学率の上昇
    - 教育問題がメディアをにぎわせた
    - 教育改革が繰返し提唱されてきた
    - 若年層の職業的キャリアが不安定化: 就職難、非正規雇用
    - 所得が向上せず、安定した正規雇用層とそれ以外の格差
    - 出生率は低下
    - 少子高齢化

5

## 2. 時系列データから見る「ゼロ年代」

- 時代の風向き: 時系列データを重ねる
  - 「国を愛する気持ち」の推移
  - 「今の日本は良い社会だ」の推移
  - 少年犯罪の増減: 実数と意識
  - 少年犯罪報道の変化
  - 体感治安の推移
  - 「思い切り暴れまわりたい」と感じるものが「まったくない」の推移
- 「ゼロ年代」
  - 不安感の高まり
  - 中学生・高校生の安定性?
  - 迷走する教育改革: 「ゆとり教育」

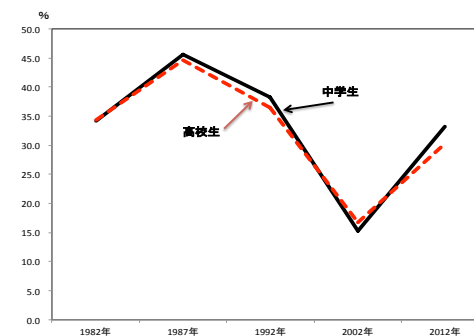
6



注) 国を愛する気持ちが「強い」(「非常に強い」+「どちらかといえば強い」と答えた人の割合 (内閣府世論調査より))

図. 国を愛する気持ちの推移

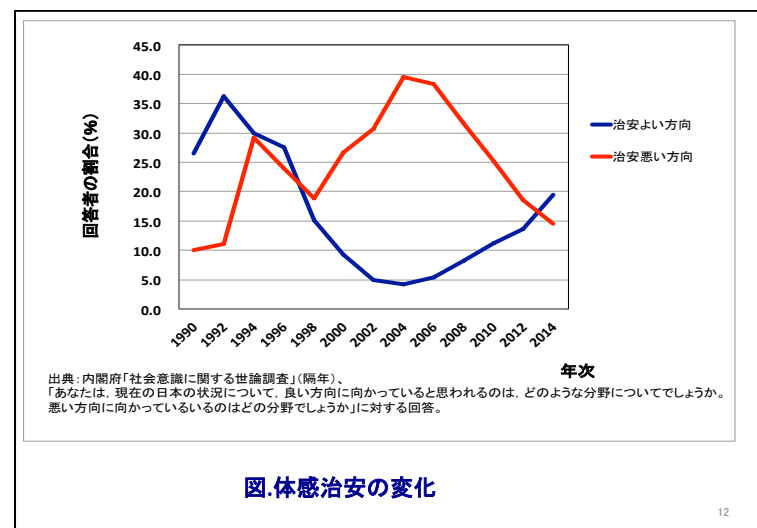
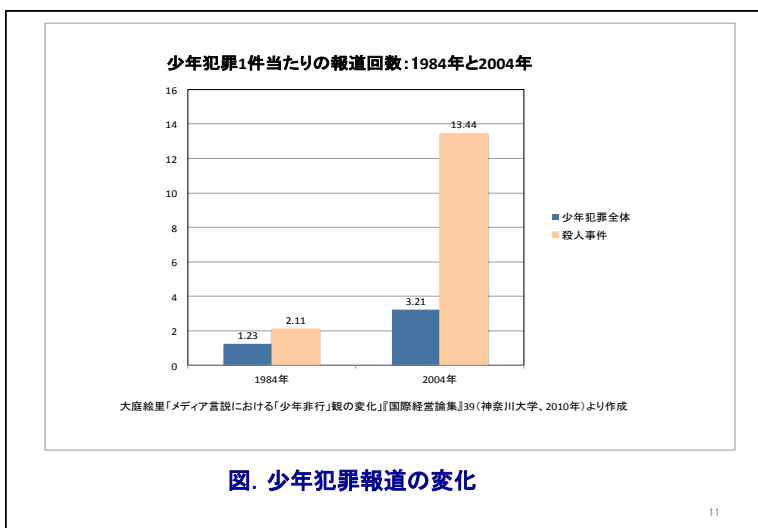
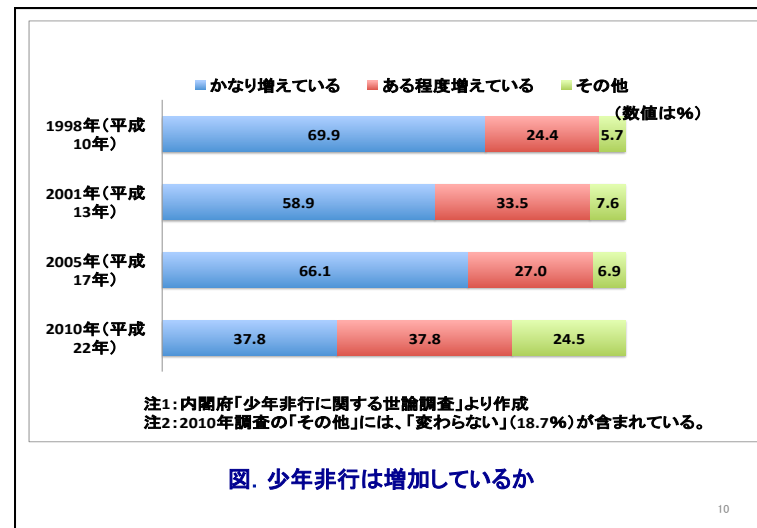
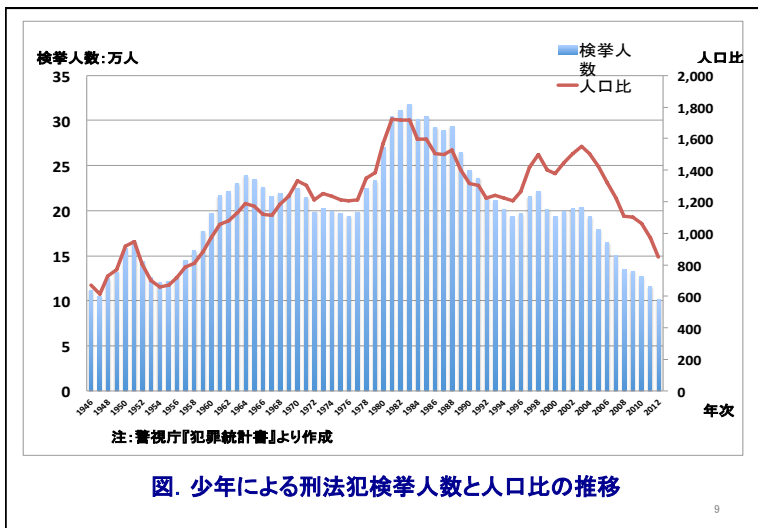
7

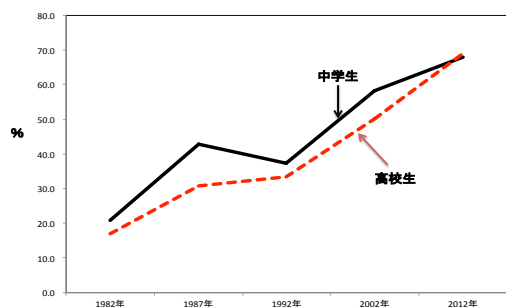


出典: NHK中学生・高校生の生活と意識調査: 「今の日本はよい社会だ」に「そう思う」と答えた%

図. 「今の日本はよい社会だ」の推移

8





出典：NHK中学生・高校生の生活と意識調査：「思いきり暮れまわりたい」と感じるものが「まったくくない」と答えた%

図.「思いきり暮れまわりたい」と感じるものが「まったくくない」の推移

13

### 3. ライフコース研究の視点

- 誕生から死まで、現代に生きる人々の人生は、**細かく区分された段階**から構成されている
  - 定められた年齢になると学校に通い、学校段階を移行
  - 卒業後は職業
  - 職業生活の中でも昇進や昇級
  - 結婚して家族を形成して、次の世代を育てる
  - 定められた年齢になれば退職、老後の人生
- 近代以降の社会では、誕生から死までの人生の流れが、「**個人の人生**」として、精緻に規則化

14

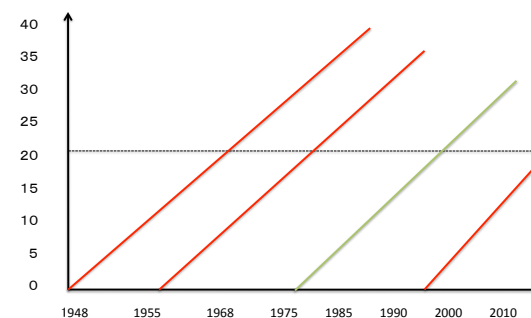
### ライフコース研究の視点

- **ライフコース**：就学、就職、結婚、退職などの人生の出来事に伴い地位や役割が変化することに着目して、**人生の道筋**を記述する概念
- ライフコース研究の主要な関心：
  - 人生の主要な段階や局面を秩序づけている規則とは？
  - それがどう変化してきたか？
  - **社会全体の動きと人々の人生との関係**を読み解く
- 基本的な視点：**人生の出来事を年齢と時代**という2つの時間の流れの中で理解
- 図：個人史と時代史の出会い

15

### 個人史と時代史の出会い

- 時代と個人史の交点を考える



16

## ライフコース研究の視点

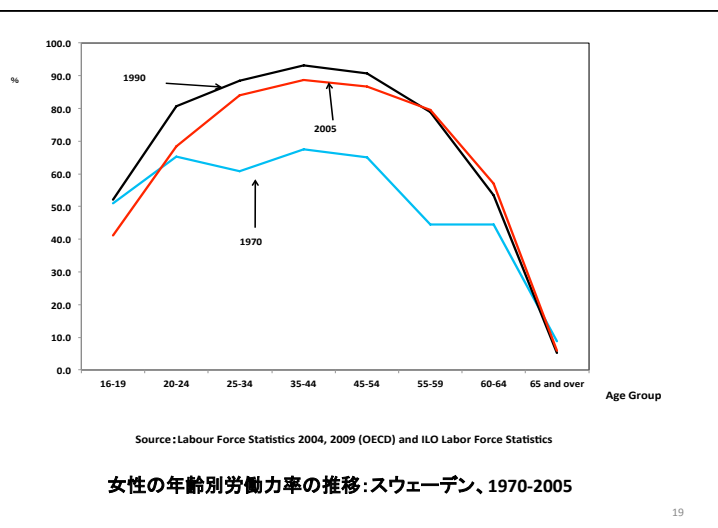
- 「1964年の東京オリンピックのときに、私は高校生で世の中がどんどん変わっていくのを実感したよ。あなたが高校生だった1970年代とは大きな違いだよ」
  - この思考方法を分析枠組みに用いる
- 出生年は、その人を歴史的時間に位置づける
- 出生コーホート**: 出生年が(ほぼ)同じ集団
- 時代の個人への影響は、**出生コーホート間の差異**としてあらわれる

17

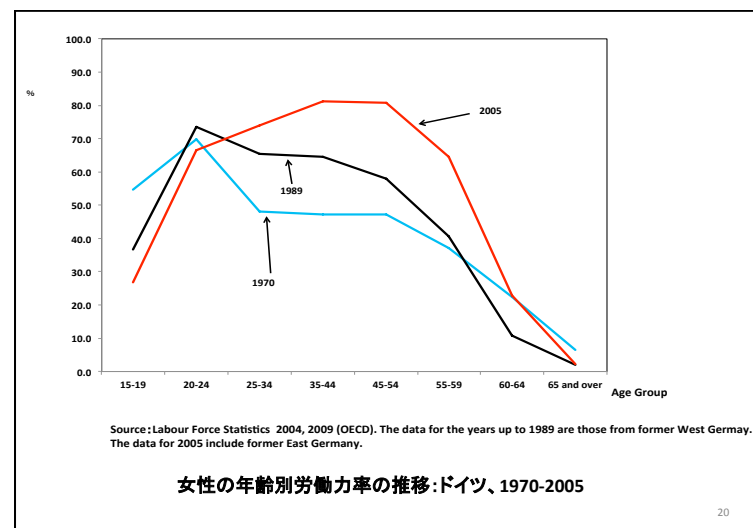
## 4. 国際比較からみた日本のユニークさ

- 日本のユニークさ**: 1970年～90年、スウェーデンやドイツ、アメリカと**同じような変化の方向をたどらなかった結果**、浮き彫りとなる
  - 女性の年齢別労働力率の比較: OECD労働力統計
  - 高年齢層の労働力率: OECD労働力統計
  - **家族主義的福祉レジーム**: 性別役割分業型、福祉が家族の人間関係に依存する
- 年齢別出生率 (age-specific fertility rate)**: 1970年代前半の特徴に注目。
  - 1970年代前半、子どもを産む年齢:**20歳代後半**に集中
  - 国際比較: 日本特有の傾向
  - World Fertility Report 2009 United Nationsより
- 大学進学率、家計の教育費負担などにも注目

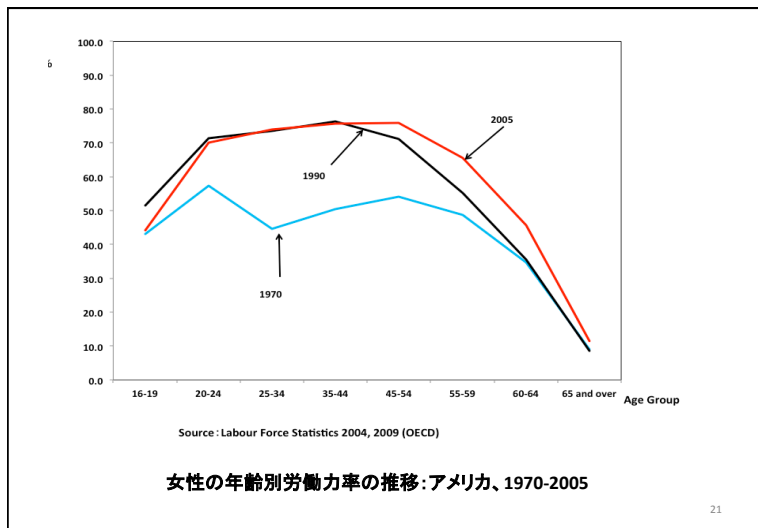
18



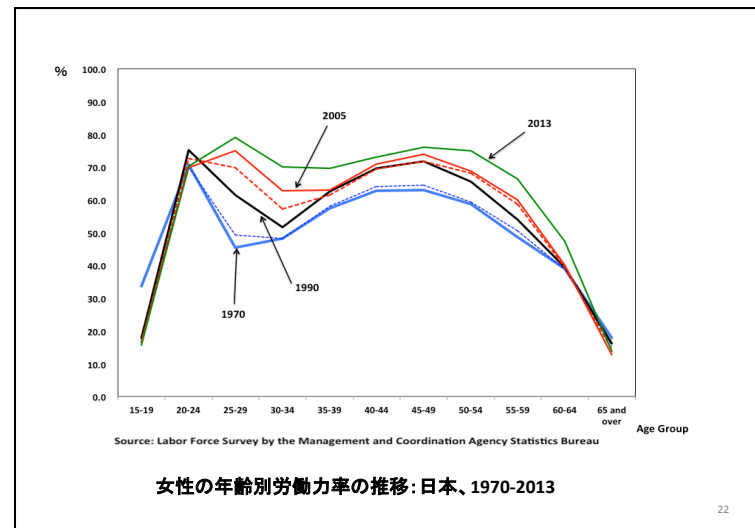
19



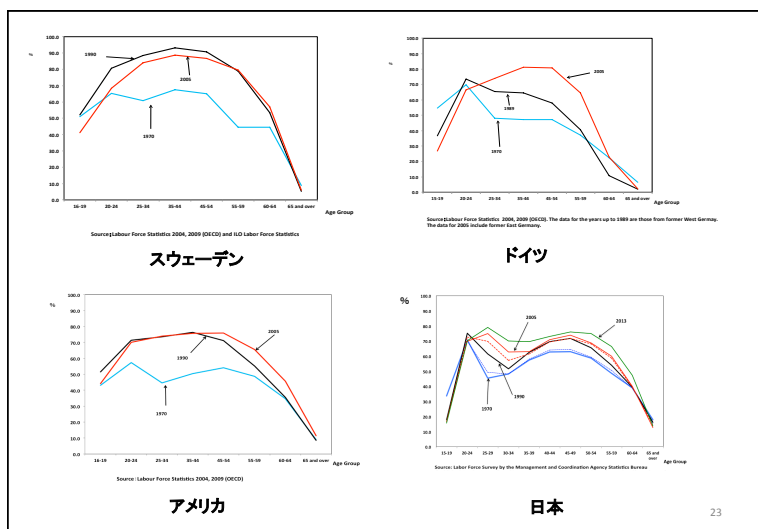
20



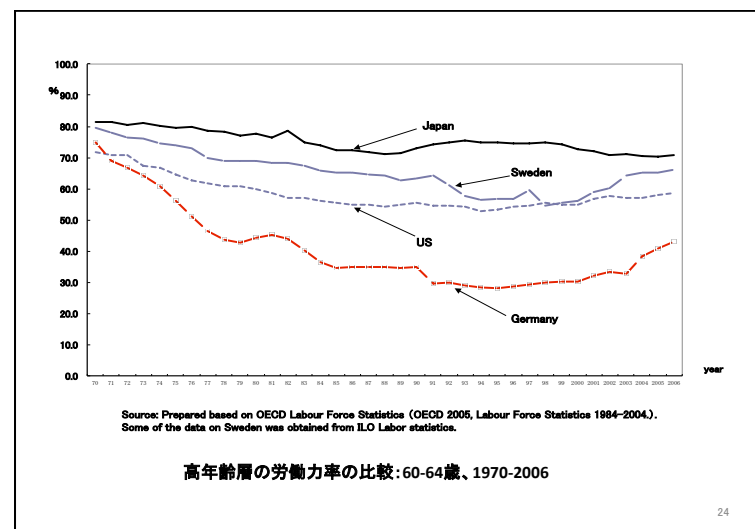
21



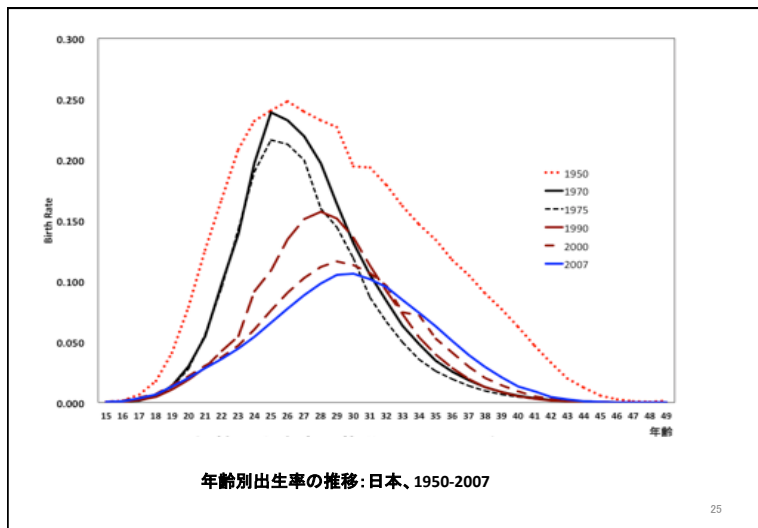
22



23



24

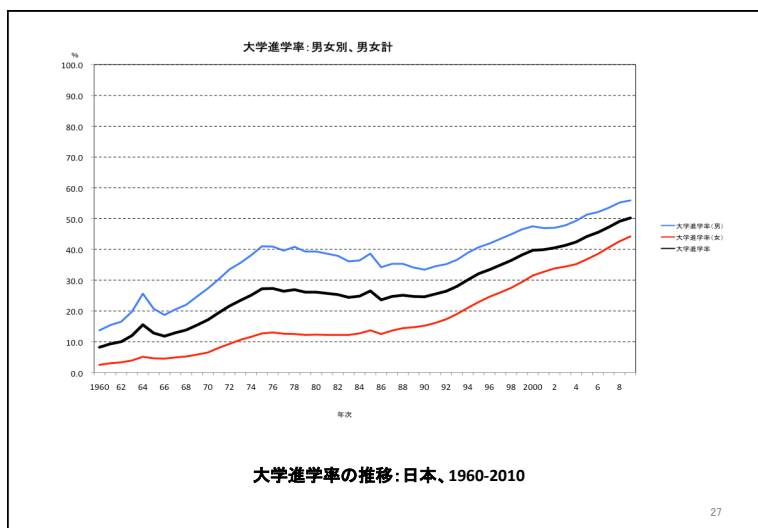


25

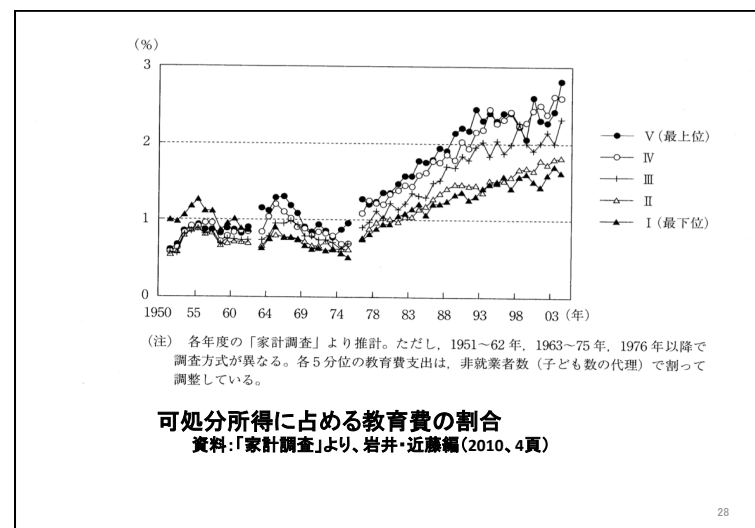
## 年齢別出生率の比較

- **年齢別出生率(age-specific fertility rate)**: ある年齢の母親が1年間に産んだ子の数を、その年齢の女性人口で除した値(1,000人当たり)
  - 各年齢の数値の合計が合計特殊出生率
  - 1950年: どの年齢でも出生率が高い、「団塊の世代」
  - 1970年、1975年: 20歳代半ばにピーク、出産が特定の年齢段階に集中、「団塊のジュニア」
  - 1980年代以降: ピークの年齢が高くなり、値は低下
  - 家族を形成する層が縮小
- 子どもを学校に送り出す家族の変化: **母親層の多様化**

26



27



28

## 家族主義

- **日本人の人生パターン: 国際比較の観点から「家族主義」**
  - 男性を稼ぎ手、女性を家族のケアの担い手とする性別役割分業
  - 高齢者における子どもとの同居率
  - 人々の福祉が家族とのつながりの中から生み出されるとする通念
  - 企業の従業員とその家族に対する福利厚生が手厚い
  - 教育費が家計に大きく依存している
  - 1970年代から90年代にかけて欧米諸国との比較によって明らか
- **日本的「家族主義」:** 1970年代から90年代まで、政策や一般的な人々の意識において、日本人のライフコースを支えたシステムの特徴
- **近年生じている変化: このシステムの行き詰まりと関係**
  - 女性の就業機会と家族形成との関係
  - 若者層における学校から職業への移行
  - 子どもと同居する高齢者の特徴
- 最近の実証的なライフコース研究の成果を用いて近年の変化を説明し、今後の方向性と課題を考察

29

## 5. データで示す日本人のライフコースの変化

### • 女性のライフコース

- **M字型:** 日本人女性の就業パターンの特徴
- **年齢段階別の就業率:** グラフにすると20歳代前半と40歳代に就業率の山
- **M字型の窪み:** 女性の就業率が20歳代後半から30歳代に低下することを示す
- 女性の就業機会が向上し、性別役割分業が変化しているのか知るために、M字型の窪みに注意が注がれる

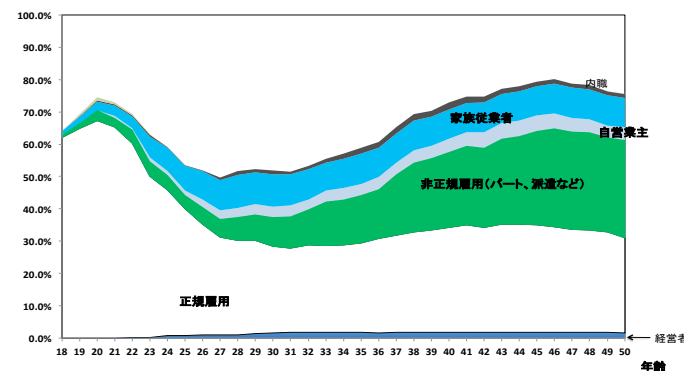
M

30

## 女性のライフコースの変化

- **M字の窪みの底は上昇:**
  - 1990年代初めまで: パートタイム雇用は中高年、**M字の右肩**に多かった
  - 近年になって**M字の左肩**の20歳代でもパートタイム雇用の割合が高まっている
- 1990年代初めに女性の大学・短大進学率が男性を上回った
- **就業継続を肯定、しかし就業機会の拡大なし**
- 女性のライフコースの変化: 「**団塊の世代**」と「**団塊ジュニア**」を比較
- 数量的な生活史データを視覚化
  - 2005年「社会階層と社会移動」全国調査
  - 2009年「日本版総合社会調査」JGSSライフコース調査
  - 2013年JGSSライフコース・パネル調査

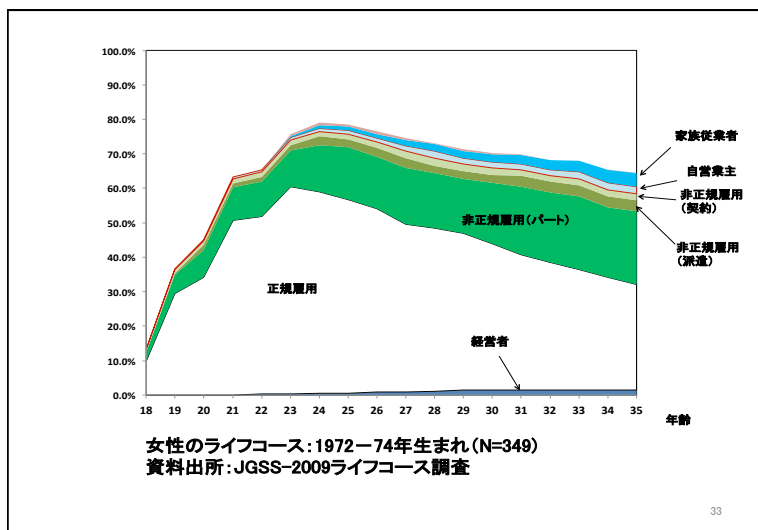
31



女性のライフコース: 1945~49年生まれ (N=404)  
資料出所: 2005年「社会階層と社会移動」調査

32





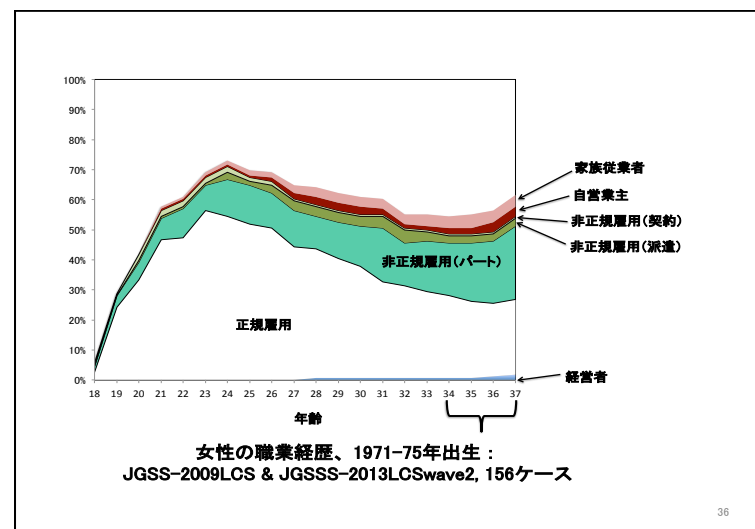
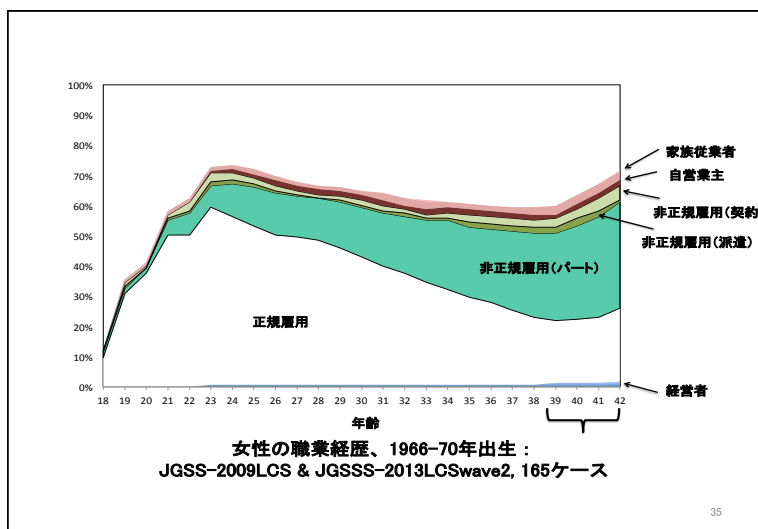
## 最新のデータ分析：JGSS-2013LCswave2

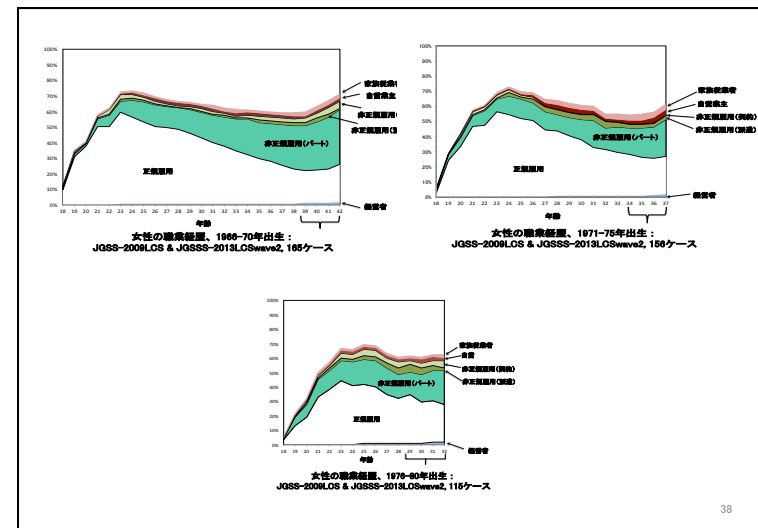
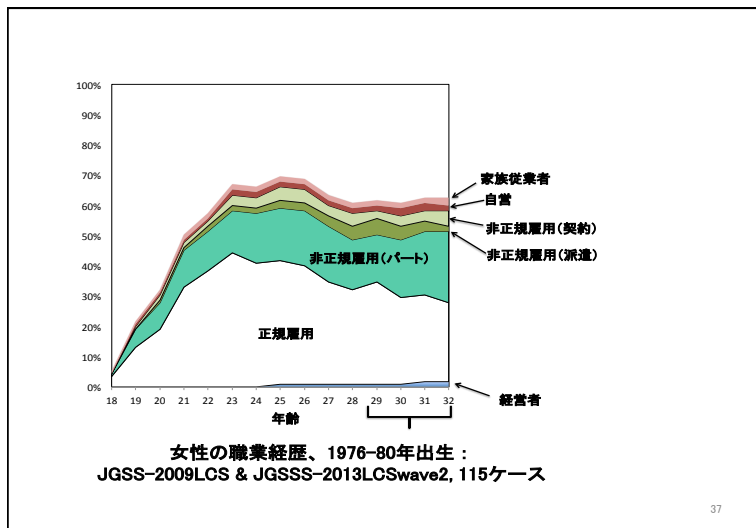
### 分析上の戦略：2通り

#### ① 年齢ごとの従業上の地位の推移によって、ライフコースのプロフィールを描く

- 2013LCwave2：JGSS-2009ライフコース調査の調査対象者に4年後再調査：パネル調査
- 2013LCwave2の調査対象者に限定
- 出生コーホート間の比較から変化を探る
- 2013LCswave2では、サンプル数は減少したが、2009LCSとほぼ同様の傾向を得る
- 2013LCwave2によって、付け加わった年齢段階をみることによって近年の変化がわかる
- 1976-80年出生のライフコースの特徴に注目する

34





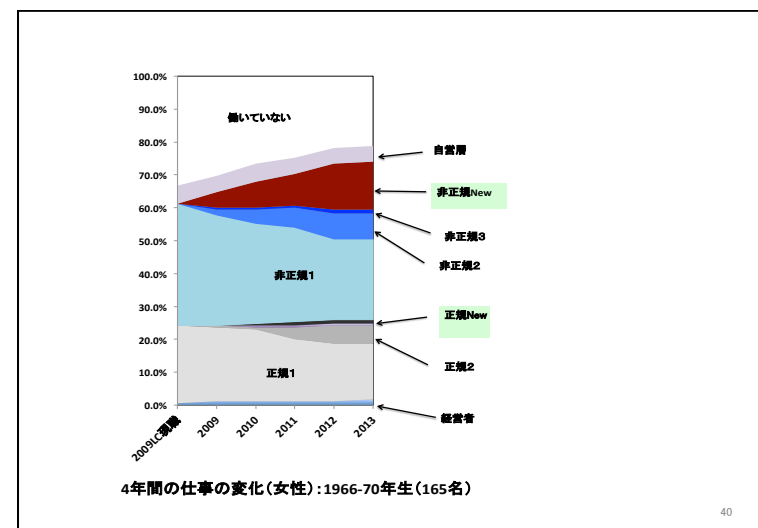
## 最新のデータ分析: JGSS-2013LCSwave2

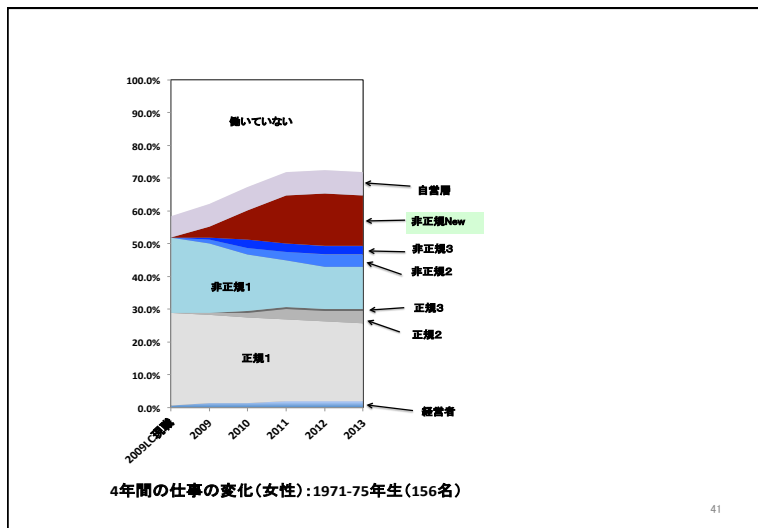
### 分析上の戦略:

② 2009年調査時点から2013年までの年度ごとの従業上の地位の推移を視覚化する。

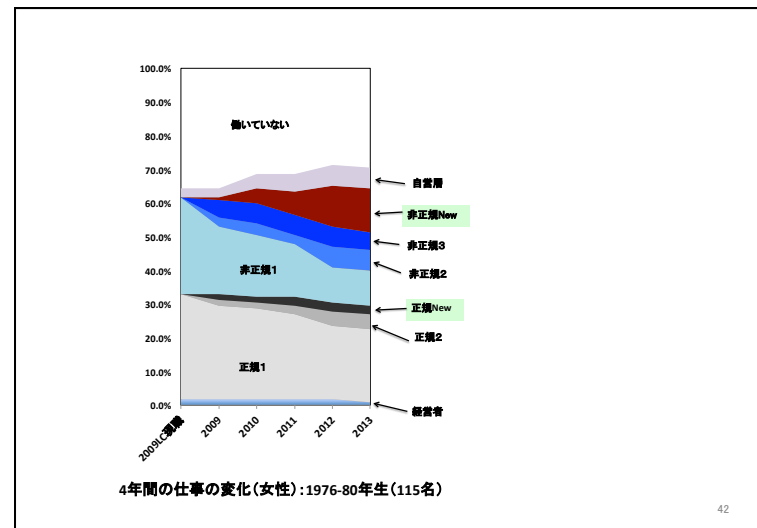
- ✓ 従業上の地位: 正規雇用と非正規雇用の区分
- ✓ 転職行動との組合せを作成;  
2009年調査時点で就業: その勤め先を第1の従業先とする  
正規1、非正規1: 2009年調査時点の勤め先  
正規2、非正規2: 4年間で1回移動  
正規3、非正規3: 2回以上の移動を経験  
2009年調査時点で不就業: 従業先移動は含めていない
- ✓ 1976-80年出生: 従業先移動が高まる、30歳代半ばまでの経歴の流動化が進んでいる
- ✓ M字型のゆくえ: ライフコースの分節化が進む

39

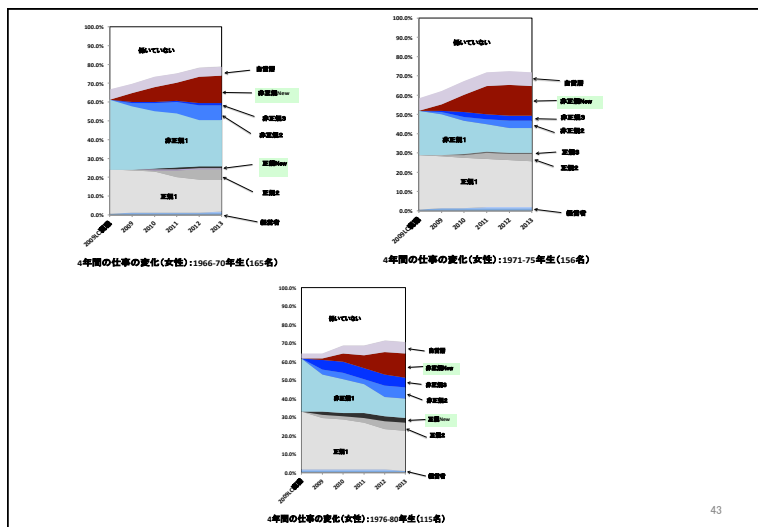




41



42

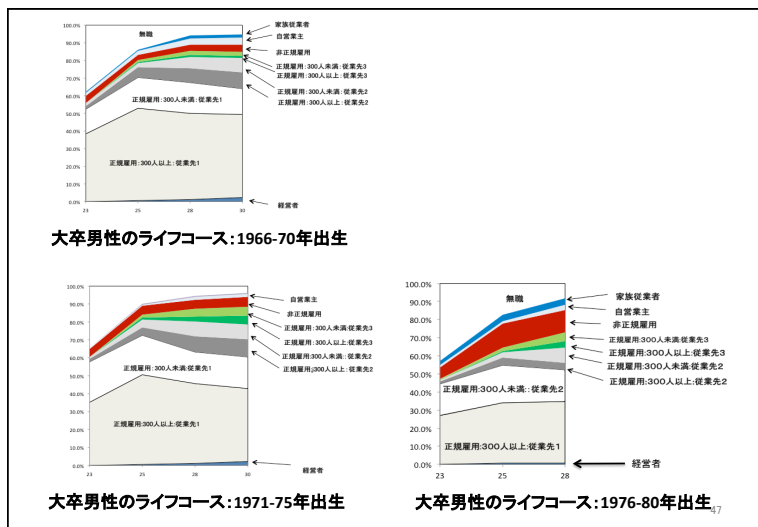
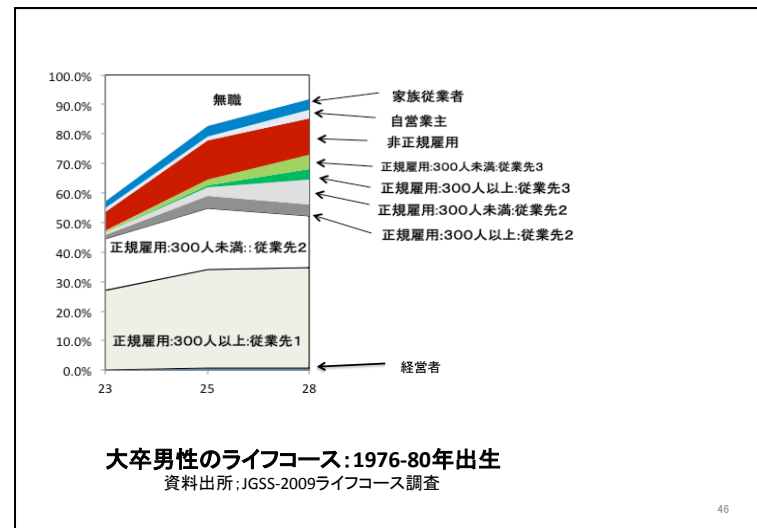
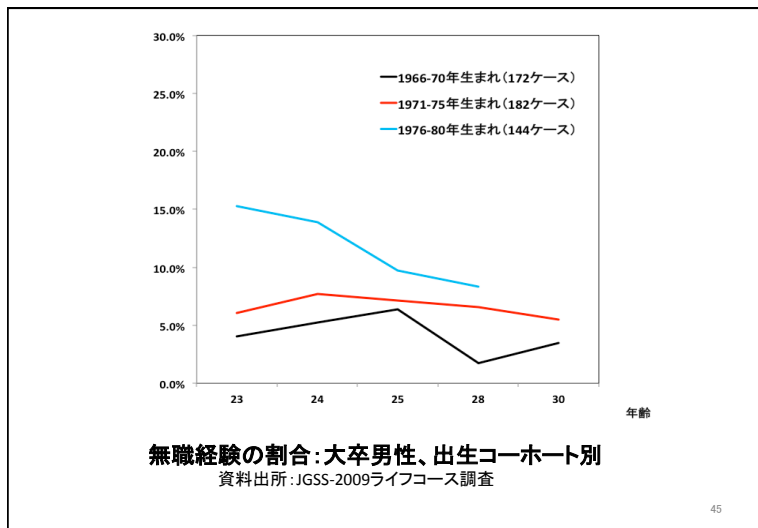


43

## 若年男性のライフコース

- 性別役割分業型の人生パターン: **男性の安定した職業生活が前提**:1970年代から1990年代前半まで
- **20歳代の不安定化**:
  - 男性の場合、1990年代後半から職業生活を開始した高校卒と大学卒、学校卒業後の20歳代の経歴に顕著な変化
  - 無職経験:学校卒業後、仕事を全くしなかった大学卒(図)
  - 男性のライフコースのプロフィール(図): 従業上の地位、従業先規模、勤め先の移動の組合せ

44



### 若年男性のライフコース

- 男性の20歳代のライフコース:
  - 高校卒と大学卒に共通して、従業員規模の大きな従業先で就業する者の割合が低下
  - 非正規雇用が拡大
  - 無職を経験する者の比率が高まっている
  - 高校卒でも大学卒でも**内部分化**が進行して、複雑化してきた
  - 大学卒が大企業で安定的な就業を継続する傾向は縮小しつつあっても持続しており、高校卒の経歴との差は明瞭

## 非正規雇用の職場環境の変化

表 職場環境に対する意識: 2009年と2013年

		女性非正規雇用 n=154	女性正規雇用 n=130	男性正規雇用 n=216
勤務時間を柔軟に決められる	2009年	2.24	**	1.90
	2013年	2.54	**	1.87
仕事の手順を自分で決められる	2009年	2.29	*	2.80
	2013年	2.54	*	2.79
仕事の量を自分で決められる	2009年	1.85	***	2.24
	2013年	2.18	***	2.17
休日や休暇を自分で決められる	2009年	2.56	**	2.43
	2013年	2.82	**	2.47
自分の仕事の分担をこなさないと、同僚の負担が増える	2009年	2.81		2.85
	2013年	2.85		3.01
上下関係に関係なく、自由に話し合える	2009年	2.61		2.76
	2013年	2.86		2.80
努力だけで昇進できる	2009年	1.86		2.21
	2013年	1.80		2.43
自分がどれだけ成果を上げたかで、収入が変わる	2009年	1.56		1.70
	2013年	1.51		1.88
お金のためというより、仕事が好きだから働いている	2009年	2.12		2.18
	2013年	2.24		2.20
仕事と生活の時間配分のバランスが取れている	2009年	2.71	*	2.50
	2013年	2.93	*	2.41

資料: 大阪商業大学JGSS研究センター「JGSS-2009ライフコース調査」「JGSS-2013ライフコース継続調査」  
 △: p < .10 \* : p < .05 \*\* : p < .01 \*\*\* : p < .001

49

## 職場環境意識の変化: 2009年と2013年

- 2009年調査、28-42歳→2013年調査、32-46歳
- 2013年調査時点で非正規雇用の女性: **職場環境意識**
  - 昇進や成果主義的昇級の可能性は乏しい
  - 仕事の柔軟性や自己裁量が認められる
  - 人間関係も良好
  - 仕事と生活とのバランスも確保
  - 2013年では非正規としての自分の働き方を肯定
  - 4年の間で非正規雇用の職場環境が変化した側面と、回答者がこのような職場に移動したという側面の両方が反映
- **正規雇用の男性と女性: 仕事からのプレッシャーが高まる**
- **仕事と生活の調和を促進することが重要な政策課題となってきたが、正規雇用の男性と女性に求められる**

50

## 高齢者の社会的地位と同居の意味の変化

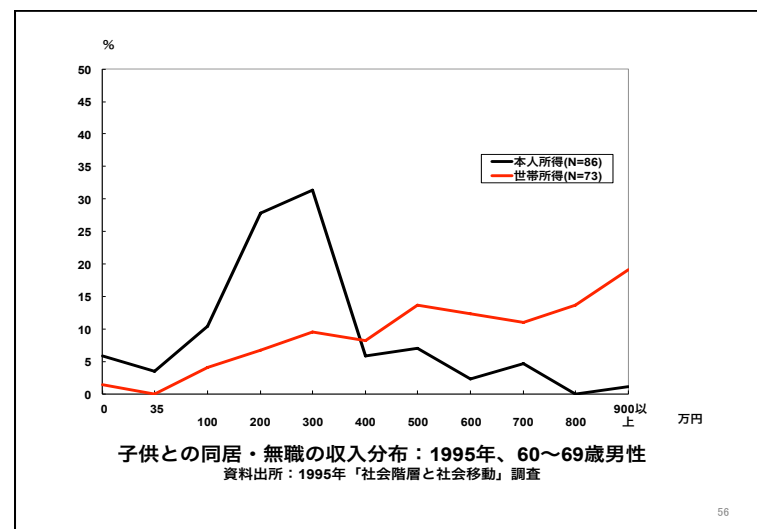
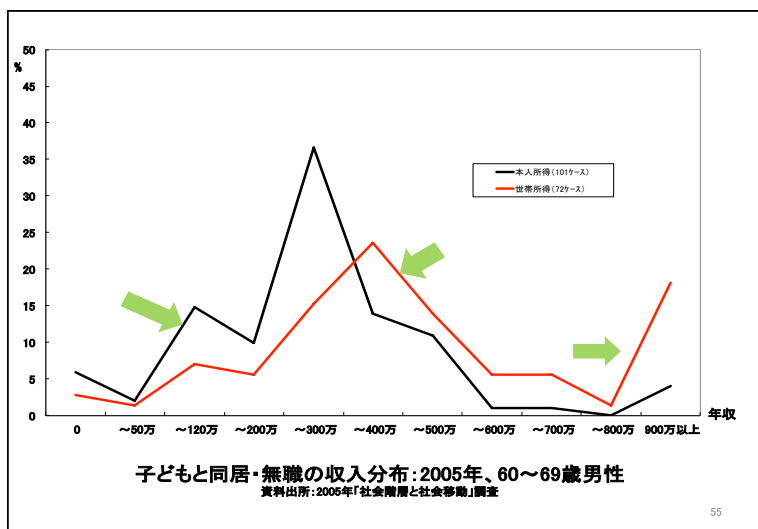
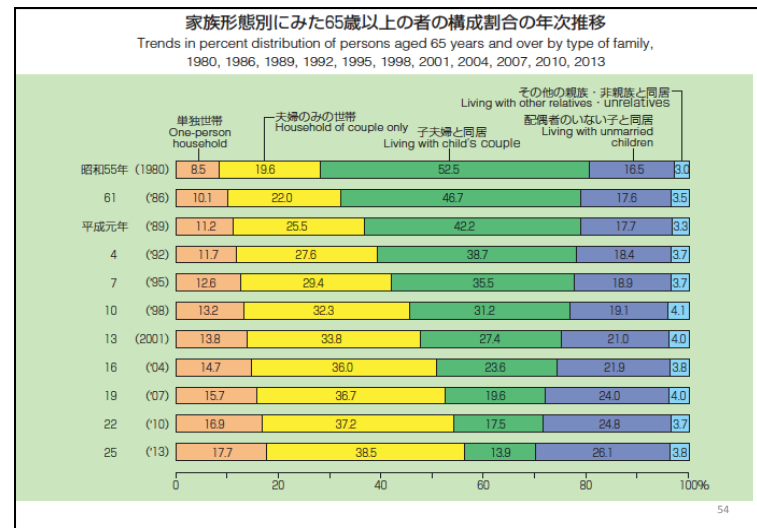
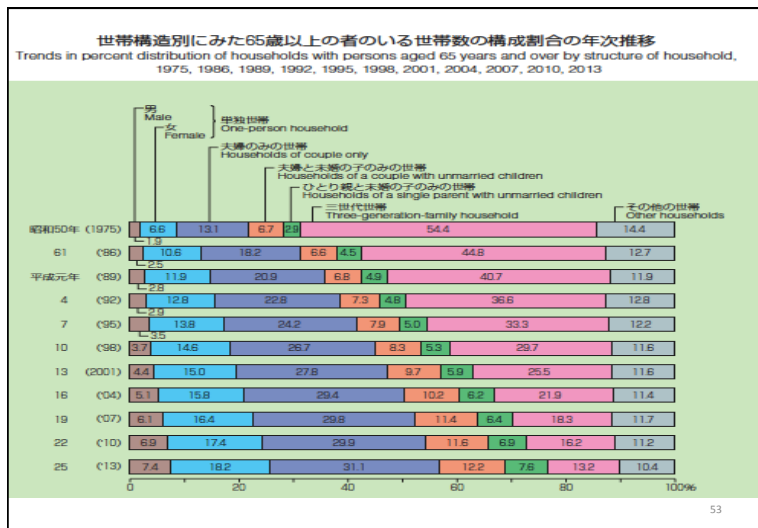
- **日本の高齢社会:** 高齢化が進んだ速さに加え、高齢者の就業率の高さ、および子どもとの同居率の高さを特徴
- **高齢者における子どもとの同居率:**
  - 低下を続けてきたが、依然として国際的にはその割合は高い: 日本の「家族主義」を示す証拠
  - 子ども世代と親世代の同居: 既婚の子どもと親との同居率は低下しているが、**未婚の子どもと親との同居率が上昇**
  - 老親扶養に関する価値観の変化: 「老後を子どもに頼るか」、2000年には有配偶女性の64%が「頼るつもりはない」と回答
  - **高齢者の福祉が、子ども世代との同居によって生み出されるとする、旧来の「家族主義」的な前提が揺らいでいる**
- **その背景:** 少子高齢化の急速な進行に加え、1970年代から高齢者政策が展開、高齢者の経済的地位が向上

51

## 子ども世代の不安定化と同居の意味

- 1990年代より、経済的依存という意味での子ども世代との同居が**減少**
- 就業継続か不就業か、子どもと同居するか否かは、選択肢となった。
- **近代的な夫婦家族:** 高齢者の不就業層にとっても選択可能な家族形態
- 2005年「社会階層と社会移動」調査より
- 子どもと同居する不就業の高齢層: 3つのタイプ
  - 低所得、**中間(年金+子どもの年収低い)**、豊かな同居
  - 1995年調査結果との比較: 「豊かさ」
- 2005年: 年金収入に頼る親世代と低所得の子世代が、**同居によって相互依存する生活形態が顕在化**
- **同居による世代間の相互依存関係は、不安定な状況をしのぐ生活スタイルとして、低所得層で重要**

52



## 6. ポスト・フォーディズム型ライフコース

- ライフコースの変化
  - 「フォーディズム型」から「ポスト・フォーディズム型」への移行
  - **フォーディズム型ライフコース**: 第二次大戦後の先進諸国において、経済成長期中流階級のみならず労働者階級にも広く浸透した性別役割分業型の人生パターン
  - 欧米先進諸国では、1970年代より「フォーディズム型ライフコース」からの「ずれ」を示す現象が生じてきた。
  - **ポスト・フォーディズム型ライフコース**: 人生段階や生活領域の境界がゆらぎ、人々が辿る人生の道筋が多様化し、異質化しつつある状態、「多品種少量生産」
  - 分節化の進行

57

## ポスト・フォーディズム型ライフコース

- 1970年代から90年代初め: 日本人のライフコースは、フォーディズム型の特徴が維持
- ポスト・フォーディズム型への移行:
  - **女性の教育機会と就業機会の拡大**: 一般に女性の機会の拡大と家族形成とが両立しない
  - **人生モデルの個人化**: 一人ひとりが職場や家族との関係よりも、自分の関心や興味、能力、経済力を判断基準にして人生をデザインする傾向が強まる
- 一人ひとりの選択の可能性が高まると同時に、選択の結果として生じるリスクをその人が背負う

58

## 縮小する日本型システム

- 1990年代後半以降、団塊の世代のライフコースを支えたシステムの行き詰まりを示す現象:
  - 日本型家族主義の変容
  - 家族主義を支える基盤の弱体化が進行
- **ライフコース全体: 人生の道筋の細分化と個別化**
  - 個人の人生設計にとっては、選択の可能性を高める
  - 同時に時代の出来事によって予期せぬほどにライフコースが不安定化する
- 現状を見る限り、家族主義に代わるシステムへの移行というよりも、旧来の日本型システムが縮小
- 現在の日本社会は、異なる時代経験を積んだ異なる年齢層が折り重なって構成されているため、ある理想像からライフコースを全面的に組み直すことは極めて難しい
- 改革: それぞれの人生段階で**小規模な修復**が繰り返される程度にすぎない

59

## 7. 家族と人生モデルのゆくえ

- 近年、若者の中で「終身雇用」や「専業主婦」を肯定する保守的な意識が高まっている
  - ポスト・フォーディズム型ライフコースへの変化
  - 20歳代の人生パターンの不安定さ
  - 意識の上では、安定したフォーディズム型へ
- 性別役割分業型の人生パターンを辿ることが可能な層は縮小しており、その「周辺」が拡大し、多様化
- 拡大し多様化した「周辺」にいかにか活力を与えて、新しいシステムを構築できるのだろうか
- 親密な人間関係の「模索」: 個人化し、人生全体に拡散
- 個人の選択と格差への対応

60

## 家族を脱家族化する

- 「高負担高福祉社会」への転換よりも、人々は今のところ「**自助**」を選択 or 余儀なくされている
- 「自助」に向けて、経済的に脆弱な層の「力」を高める施策（就業支援、職業訓練など）が必要
- 「**家族を脱家族化することが家族を救う**」（エスピン・アンデルセン）という考え方、より重要
- 家事や育児、高齢者のケアなど、これまで家族に課せられてきた責任と負担を軽減することが、**親密な家族的人間関係の形成と維持のためにも**、これからますます必要となる

61

### <付記>

- 「社会階層と社会移動（SSM）」調査データの使用に関しては、2005年SSM調査委員会の許可を得ている。
- 日本版General Social Survey 2009ライフコース調査（JGSS-2009LCS）は、大阪商業大学JGSS研究センター（文部科学大臣認定日本版総合社会調査研究拠点）が実施している研究プロジェクトである。
- JGSS-2013ライフコース調査wave2（JGSS-2013LCSwave2）は、科学研究費補助金・基盤研究B（「失われた10年」以後の教育機会とライフコースに関するパネル調査研究）を得て、京都大学大学院教育学研究科教育社会学講座と大阪商業大学JGSS研究センターが共同で実施しているプロジェクトである。

62

### <文献>

- 岩井八郎、2015、「多様な道筋に分かれる女性の職業経歴—JGSSで読む日本人の意識と行動 第32回—」日本政策金融公庫『調査月報』No.083、20-21頁。
- 岩井八郎、2015、「非正規雇用女性に見られる職場環境意識の改善—JGSSで読む日本人の意識と行動 第31回—」日本政策金融公庫『調査月報』No.082、20-21頁。
- 岩井八郎、2015、「ライフコース」近藤博之・岩井八郎『教育の社会学』第3章、放送大学教育振興会、40-60頁。
- 岩井八郎、2015、「少年非行の増減」近藤博之・岩井八郎『教育の社会学』第3章、放送大学教育振興会、199-218頁。
- 岩井八郎、2014、「多様化するライフコースとその課題」猪木武徳編『<働く>は、これから 成熟社会の労働を考える』第3章、岩波書店、81-113頁。
- 岩井八郎、2013、「戦後日本型ライフコースの変容と家族主義—数量的生活史データの分析から」落合恵美子編『親密圏と公共圏の再編成 アジア近代からの問い』京都大学出版会、127-153頁。
- 岩井八郎、2009、「変わるライフコースと人生設計」①～⑩、日本経済新聞連載、2009年12月4日～12月18日。
- エスピン・アンデルセン（林昌宏訳）、2008、『アンデルセン、福祉を語る』NTT出版。

63

ご清聴ありがとうございました！

64